

『鳳城聯句集』訓注稿(三)

楊 昆 鵬

本稿は版本『鳳城聯句集』所収聯句作品について、試みに読み下しを施し注釈を付けたものである。前稿(『京都大学国文学論叢』第三五号、平成二八年三月)の続きとして、全三十作のうち、第七から第十までの四点をここに掲載する。

【作者】(初出人名のみ)

(第八)

宗倫 不詳。

守浣 不詳。

(第九)

光勝 周南円旦、僧侶(臨濟)。生年未詳、正保四年(一六四

七)没。法諱、初め光勝、のち円旦。

【凡例】

- ・ 五言の句冒頭に通し番号を付した。
- ・ 漢字の字体は原則として現在通行のものに統一した。
- ・ 訓点は底本のままにし、読み下しは原則として訓点に従うが、一部句意に基づき変更したものもある。なお、読み下しに適宜濁点を施した。

- ・ 明らかな誤字もそのまま翻刻し、期待される本文を右傍に(某カ)のように注記した。
- ・ 注は最小に止め、難読箇所や一部の熟語について典拠と用例を示す。

虞第七 慶長十八年正月二十二日

1 鶯^ハ向^ニ風^ト神^ニ唱^フ

鶯は風神に向かひて唱ふ

2 寿^メ梅^ヲ請^レ禱^ト無^ク

梅を寿して禱らんと請はんや無きやと

3 鳳^ハ知^ニ天^ト聖^ニ至^ル

鳳は天聖を知りて至る

重

4 停^テ竹^ヲ現^レ祥^ヲ乎^カ

竹に停まりて祥を現ずるか

宮

5 山^ハ彩^ス堯^ト眉^ハ八^ニ

山は堯眉の八を彩す

節

6 世^ハ疑^ニ君^ト実^ヲ迂^ニ

世は君実が迂を疑ふ

雲

7 清朝夷亦洛 清朝 夷もまた洛 潤

8 戦局越兼呉 戦局 越と呉と 御

9 鶴蓋飛仙具 鶴蓋 飛仙の具 賢

10 驢詩行客図 驢詩 行客の図 岳

(1) 「風神」は風采・神韻の意味で用いられることが多いが、ここは黄庭堅「河伯借泥封玉腕、風神翻浪沃香腮」のように風を司る神の意。

(2) 遠山を美女の眉と喩える表現が漢詩にあるが、ここは逆に聖人の八色の眉を使って彩る山を比喻する。曹植「堯眉八彩、舜目重瞳」(曹子建集)。

(3) 司馬光、迂夫と号す。蘇軾が詩「司馬君実独樂園」を作り、司馬光の朝政から遠ざかることすなわち「迂」の姿勢に疑問を呈し、政界復帰を切望した。詩中「兒童誦君実、走卒知司馬」とある。

(4) 清らかな朝廷。蘇軾「清朝竟不用、白首仍憂時」(故李誠之待制六丈挽詞)。また「洛」は司馬光の独樂園の所在地である洛陽からの連想か。

(5) 驢馬に乗る詩人像は蘇軾「雪中騎驢孟浩然、皺眉吟詩肩聳山」(贈写真何充秀才) など多く、また画題にもなった。

11 絮輕メ訛^ル雪^ノ颺^カ 絮軽やかにして雪の颺ぐかと訛る 璘

12 竿^ノ動^テ覚^フ峰^ノ趨^ム 竿動きて峰の趨るかど覚ふ 寿洪

13 雁^ハ楚雲^ノ湘水 雁は楚雲 湘水 賡

14 蟾^ハ松江^ノ洞湖 蟾は松江 洞湖 緒

15 秋^ノ心^ハ碓^ハ素^ニ 秋心 碓は素に愜ふ 竹

16 闌^ノ夢^ハ枕^ハ孤^ヲ 闌夢 枕は孤を敬つ 重

17 塵^ヲ聽^フ旅^ノ檐^ノ雨 塵を塵す 旅檐の雨 宮

18 煖^ム身^ヲ苕^ノ岸^ノ墟 身を煖む 苕岸の墟 節

19 良^メ媒^ヲ琴^ヲ挑^ム卓^ヲ 良媒 琴卓を挑む 雲

20 説^ト士^ハ壁^ヲ頌^フ虞 説士 壁虞を頌つ 潤

(6) 『韻府群玉』孟浩然「吾詩思在風雪中驢子背上」(嘗於灞橋冒雪騎驢尋梅花) という。

(7) 「蟾」は月。杜甫「刁斗皆催曉、蟾蜍且自傾」(八月十五日夜二首其二)。梅堯臣「孤舟洞庭去、落日松江宿」(送良玉上人還昆山)。「洞湖」と13句の「湘水」で瀟湘八景を踏まえる。

(8) 「秋心」は「愁」。「愜素」は韋応物「分曹幸同簡、聯騎方愜素」(晚出府舍與独孤兵曹令狐士曹南尋朱雀街帰里第)に用例は見えるが、ここは「素懷」・「素心」の略で、氣持ちにかなう意か。『三体詩』熊孺登「一見清容愜素聞、有人伝是紫陽君」(贈俟山人)。

(9) 熟語「塵聽」は世俗の音という意、「聽を塵す」と訓む場合は耳を汚す、旅愁を誘うことか。策彦周良「餘寒花晚旅檐雨、若是無詩春不春」(和大光試筆韻)。

(10) 「苕岸」は若花の咲く岸辺、「墟」は土で出来た墟。蘇軾「苕岸霜花尽、江湖雪陣平」(南歌子・湖州作)。

(11) 「良媒」は媒酌する人間の意であるが、ここは琴という良き媒をいう。司馬相如が琴を弾き、卓文君に好意を伝えた故事(史記・司馬相如列伝)。

(12) 『史記・平原君虞卿列伝』「虞卿者、遊説之士也。躡躡檐簞説趙成王。一見、賜黄金百鎰、白璧一双」。

21 好景、遊一方、境 好景は遊方の境 御

22 衡一杓、造一化、枢 衡杓は造化の枢 賢

23 栽花無醜一樹 花を栽えては醜樹無し 岳

24 観柏一箇、团蒲 柏を観ず 一箇の团蒲 璠

25 貧道富一口 貧道 金口に富む 洪

26 多聞入鎖鬚 多聞 鎖鬚より入る 竹

27 不才如是、我 不才 如是の我 澗

28 齊物寓言、夫 齊物 寓言の夫 麋

29 愁海鵬難搏 愁海 鵬も搏ち難し 御

30 飢時鷹待呼 飢時 鷹は呼を待つ 岳

(13) 「衡杓」は北斗の第五星である「玉衡」と北斗の柄の部分をいう。「杓」を合わせて北斗の柄をいうか。

(14) 梅堯臣「野鳥岸眠有閑意、老樹着花無醜枝」(東溪)。花を咲かせるすべての木々が美しい、それが22句「造化」の力である。歐陽修「造化未嘗私一物、各随妍醜自芳菲」(春帖子詞皇帝閣六首其五)。

(15) 禪院に植えられた柏を眺める。蘇過「西隣正想蒲团穩、古殿遙遙瞻老柏双」(次韻叔父小雪二首其一)。

(16) 金口は如来の口舌、またその教え。ここは後者か。

(17) 『緇門警訓』「結集法藏阿難從鎖鬚入、誦出仏経一無遺漏」。

(18) 『莊子・内篇』「齊物論」を詠む28句を承けて、「逍遙遊」の鵬を連想。

31 指引眼、指劫 指引 指を眼すれば劫 竹

32 生^シ一^シ計^シ寄^レ生^シ生^ハ 生計 生を寄せしは 洪

33 紅^ハ一^ハ裊^ム柔^ク條^ノ榿^ノ 紅は裊む 柔條の榿 雲

34 碧^ハ一^ハ凋^レ落^レ葉^ノ 榿^ノ 碧は凋む 落葉の榿 御

35 代^ニ昭^ル今^メ道^ヲ舜^ヲ 代昭にして今は舜を道ぶ 璘

36 湖^ハ勝^レ古^ノ榿^ヲ一^ヲ連^ス 湖勝れて古は榿を榿ましむ 雲

37 縛^メ月^ヲ一^ヲ愛^シ繩^ヲ短^シ 月を縛して愛繩短し 賡

38 探^テ幽^ヲ一^ヲ吟^シ杖^ヲ扶^ク 幽を探して吟杖扶く 澗

39 屏^一居^ニ寧^ク履^キ棘^ヲ 屏居 寧ろ棘を履かんや 洪

40 新^シ火^ヲ好^シ鑽^ル榿^ヲ 新火 榿を鑽るに好し 御

(19) 景徐周麟「老去易忘屢眠指、三年一別数秋堂」(翰林胡
蕙集「次韻悼遺孫藏主」)。

(20) 須臾、短い時間、31句の「劫」と対偶する。

(21) 西湖に隠遁する林逋、治世をもちたらしめた舜の対。

(22) 来客を拒み隠居すること。柳宗元「屏居負山郭、歳暮驚
離索」(郊居歳暮)。

(23) 『論語・陽貨』「鑽燧取火、期可已矣」に対して何晏集解
は馬融説を引き、『周書・月令』有更火之文、春取榿柳

之火、夏取桑柘之火」とする。李嶠「槐煙乘曉散、榿火
応開春」(寒食清明日早赴王門率成)。

41 縦^レ目^ヲ一^ヲ晴^ク欄^ノ上^ニ 目を縦にす 晴欄の上 岳

42 深^シ思^ヲ一^ヲ險^ク棧^ヲ紆^ク 思を深くして險棧紆ふ 宮

43 蜀^ノ全^ハ一^ハ子^ノ漏^ル屋^ニ 蜀の全は子が漏屋 竹

44 揚^一一^ツ賈^ノ塵^ヲ一^ヲ衢^ニ 楊の一つは賈の塵衢 雲

45 茉^ヲ笑^シ施^テ如^シ在^ス 茉笑んで施在すが如し 璘

46 菊^ヲ摧^テ陶^ヲ就^シ燕^ニ 菊摧けて陶燕に就く 澗

47 蝶^ハ非^ニ真^ニ醉^ニ 蝶は真酔に非ずして酔ふ 雲

48 蛛^ハ以^テ耳^ヲ濡^ク 蛛は耳濡を以て濡ふ 洪

49 灯^ハ掛^ク無^ク一^ツ声^ヲ瀑^ニ 灯は無声の瀑を掛く 雲

50 丹^ハ還^テ換^ル骨^ヲ一^ツ炉^ニ 丹は換骨の炉に還る 御

(24) 「予」は蜀に住み着いた杜甫か。「床頭屋漏無乾処、雨脚
如麻未断絶」(茅屋為秋風所破歌)。

(25) 「楊」は楊貴妃、「賈」は国政を愛う賈誼か。

(26) 「陶」は「三径就荒」(帰去来辞)の陶淵明であるが、45

句に西施とあるので、陶朱公からの連想。

(27) 灯の光を瀑布と喩えるか。魚第六11句に既出。

51 隻一宵、誰が百菓ぞ 隻宵は誰が百菓ぞ 緒

52 万歳、彼、三壺 万歳は彼の三壺 竹

53 兜卒、楽 天院 兜卒は楽天が院 潤

54 竺一乾、孔子、桴 竺乾は孔子の桴 岳

55 仁一田 耕以筆 仁田 耕すに筆を以てす 宮

56 宦一 路 苦之 轆 宦路 苦しみの轆 洪

57 青鎖 限 門 柳 青鎖 門に限する柳 御

58 白一 漫 隔 岸 蘆 白漫 岸を隔つる蘆 竹

59 波、欺、過、渡、歳 波は過渡の歳を欺く 雲

60 臘、仰、見、星、瞿 臘には見星の瞿を仰ぐ 璠

(28) 「百菓長」の略か、酒は百菓長と呼ばれる(佩文韻府)。

独りの夜の寂しさを酒で慰めるのは誰か。

(29) 兜率天、知足天とも。欲界六天中の第四。

(30) 仏の別称。『弘明集』に「老子即仏弟子也。故其経云、

問道竺乾、有古先生」とある。白居易「從此始堪為弟子、

竺乾師是古先生」(斎戒)。

(31) 仁義の田か。「仁田義鋤徳其種、晩歳坐看苗幪幪」(宋・

李流謙「挽王隠君」と見えるが、用例は希少。

(32) 沈約「散朱庭之奕奕、入青鎖而玲瓏」(八詠詩・登台望

秋月)など、美しい宮殿の意。ここは門に青柳が纏う比

61 送、照、鐘、猶、色 照を送る鐘猶ほ色めく 岳

62 酌、霞、鏡、半、朱 霞を酌みて鏡半ば朱し 璠

63 浮、蹤、情、始、薄 浮蹤 情の薄きに始まる 洪

64 騷、会、意、多、娛 騷会 意の多きは娛しむ 御

65 緡、睡、譜、休、暇 睡譜を緡くは休暇 麿

66 転、和、氣、孟、陬 和氣を転ずるは孟陬 雲

67 芳、園、禽、作、吏 芳園 禽吏と作る 竹

68 法、窟、毘、匡、徒 法窟 毘徒を匡す 岳

69 鈍^{シトス} 鏡^ツ 詞^ツ 鋒^ツ 陸 鏡を鈍^{シトス}しとす 詞鋒の陸 璘

70 投^ス 機^ツ 画^ツ 角^ツ 字 機を投^スず 画角の字^{シヤ} 澗

(33) 入相の鐘が夕日を送る。「幾杵鐘声送夕陽、深紅淺紫月交光」(三益「月来花弄影」)。

(34) 『佩文韻府』に「混沌睡譜」とみえる。

(35) 「孟陬」は正月。「撰提貞於孟陬兮、惟庚寅吾以降」(離騷)。

(36) 五百人の毳衣を着た弟子。道潜禪師が初めて臨川に赴き浄慧禪師に謁し、将来五百毳徒を持ち王侯に重んじられると云われた。

(37) 「鏌」は名劍の莫邪。かの莫邪よりも鋭いのは陸機の詞鋒だ。駱賓王「潘陸詞鋒駱駟飛」(疇昔篇)。

(38) 前句「陸」から「機」字を連想し、仏語・悟りに転じる。画角は古楽器。「太原字上座、五更聞画角」(五家正宗賛助桀)。

71 篋^ツ 禪^ツ 関^ツ 板^ツ 子 篋は禪関の板子^{シヤ} 雲

72 棒^ツ 除^ツ 夜^ツ 金^ツ 吾 棒は除夜の金吾^{シヤ} 澗

73 四^ツ 隊^ツ 魚^ツ 行^ツ 幾 四隊 魚行いくばくぞ 御

74 同^ツ 群^ツ 野^ツ 鹿^ツ 俱 同群 野鹿俱にす 賡

75 樂^ツ 容^ツ 環^ツ 堵^ツ 膝^ツ 樂みては環堵の膝を容る 洪

76 仕^ツ 愧^ツ 輿^ツ 台^ツ 軀^ツ 仕へては輿台の軀を愧づ 璘

77 弥^ツ 俗^ツ 臥^ツ 開^ツ 李 弥俗なり 臥して開く李^{シヤ} 雲

78 若^ツ 人^ツ 遍^ツ 挿^ツ 莢^ツ 若の如き人遍く莢を挿す 岳

79 担^ツ 恩^ツ 肩^ツ 豈^ツ 息^ツ 恩を担ふ 肩めに息んや 御

80 結^ツ 患^ツ 影^ツ 甚^ツ 癩^ツ 患を結びて影甚だ癩す 洪

(39) 機械装置または要。禅僧の日常修行に法具の竹篋が欠かせない。

(40) 皇帝や大臣の警護に当たる官名。次の73句とともに『三体詩』王建「金吾除夜進儺名、画袴朱衣四隊行」(宮詞)を踏まえる。

(41) 「環堵」は狭小な居室。陶淵明「環堵蕭然、不蔽風雨」(五柳先生伝)。黄庭堅「衡門低首過、環堵容膝坐」(顔徒樂貧齋齊二首、其一)。

(42) 身分の賤しい人。『文選』張衡「賚皇僚、逮輿台」(東京賦)。杜甫「越羅與楚練、照耀輿台軀」(後出塞五首、其四)。

(43) 蘇軾「臥開桃李為誰妍、对立鸚鵡相媚嫵」(上巳日、与二三子携酒出遊、随处見輒作数句、明日集之為詩、故辞無倫次)。

81 木母 囀ヒスカシ 寒ノ重ニ 木母 寒の重きに囀し 竹

82 花王 移ス 地ノ映ケルニ 花王 地の映たるに移す 宮

83 忘還 文囿ノ雉 還ることを忘る 文囿の雉 澗

84 求飽 禹ノ村ノ鳥 飽きてを求む 禹村の鳥 璘

85 感旧 首丘ノ碣 旧を感じて丘に首する碣 岳

86 致忠 翼ノ国 忠を致して国を翼くる 瑚 御

87 霜巖 麻ノ荻ノ手 霜巖そかにして荻手を麻す 璘

88 涯老 蓬ノ顛 涯老いて蓬顛を櫛る 廣

89 玉友 夭ノ彭祖 玉友 彭祖を夭なりとす 洪

90 財童 師曼殊 財童 曼殊を師とす 御

(44) 牡丹 策彦周良 「木母蹠寒山径斜、却嫌春色事豪奢。牡丹始識樵夫後、枉被人呼富貴花」(樵径梅)。牡丹は前句の「木母」すなわち「梅」と対偶される。

(45) 文章の園 蕭統『文選』序「歴観文囿、泛覽辞林」。

(46) 禹会村、禹が治水した村。蘇軾「樵蘇已入黄能廟、烏鵲

猶朝禹会村」(濠州七絶、其一)。

(47) 死んだ後故郷に葬ること。屈原「鳥飛反故郷兮、狐死必首丘」(九章・哀郢)。碣は碣石山、禹の治水事業にみえる地名。

(48) 瑚簋、治国の人材。『抱樸子』「器非瑚簋、必鋭進而退速」。

(49) 「蓬顛」は蓬のように髪が乱れた頭。87句の荻手と対偶。

(50) 玉友は仙人の別称。彭祖は八百歳まで生きた伝説上の人物(列仙伝)。

(51) 善財童子、曼殊すなわち文殊菩薩の勧めで修行を積みはじめたという(華嚴経入法界品)。

91 巧言 饒舌ノ鸚 言を巧みにす 饒舌の鸚 宮

92 説乱 曩膜ノ鸚 乱と説く 曩膜の鸚 雲

93 松長 千尋ノ翠 松は千尋の翠を長ず 岳

94 蒲抛 百万ノ虚 蒲は百万の虚を抛つ 澗

95 拾春 香満ノ袖 春を拾ひて香は袖に満つ 廣

96 温故 格連ノ珠 故を温めて格は珠を連す 洪

97 唐再 齊梁ノ李 唐は再び齊梁の李 御

98 帽、枯^ム杭^カ密^ミ蘇^ソ 帽は枯る 杭密の蘇 璘

99 笠^{カサ}穿^テ難^ガ障^{サヤ}霧^{キリ} 笠穿ちて霧を障ぎ難し 緒

100 紙^{カミ}貴^メ耐^タ傾^{カス}都^{ミヤコ} 紙貴くして都を傾くるに耐へたり 竹

(52) 『説文』鴝鵒。『正字通』「又名八哥、幽明録云、五月五日剪其舌端使田、教令学語、能人言。」

(53) 『宋書・武帝本紀』「劉毅家無担石之儲、樗蒲一擲百万。」

(54) ともに南北朝時代南朝の王朝であり、腐敗していたので国政が振るわず短命であった。李氏の唐王朝もまたその過ちを犯しているという。

(55) 杭州と密州、いずれも蘇軾が長官を務めた。帽は峨嵋山か。

齊第八 慶長十八年十二月二日

1 谷^ヤ寒^{サム}春^{ハル} 早晚^{サト} 谷寒くして春は早晚か

2 鶯^ウ似^ニ占^ル幽^ウ棲^キ 鶯は幽棲を占むるに似たり 雲

3 雪^{ユキ}滿^ミ田^タ 清潔^{ケツセツ} 雪満ちて田は清潔

4 鷺^{ササガ}疑^ヒ下^シ 麋^カ畦^ヰ 鷺は麋畦に下るかと思ふ 御

5 風^{カゼ}揺^ユ蘆^{アシ}鼓^ウ瑟^{シキ} 風揺れて蘆は瑟を鼓す 節

6 露^{ツキ}凝^カ草^{クサ}磨^ス珪^ヱ 露凝りて草は珪を磨す 澗

7 月^{ツキ}暗^ク悲^{カミ}秋^{アキ} 月は暗し 秋を悲しむ 竹

8 隱^{カクレ}真^{マコト}違^ヒ世^ヨ 隱は真なり 世に違ふ 重

9 涼^{スズシ}蟬^{セミ}嫌^{イヤ}夏^{ナツ}浅^{アサ} 涼蟬 夏の浅きを嫌ふ 召

10 漚^ウ鳥^{トリ}戲^{アソ}波^{ナミ}低^ヒ 漚鳥 波の低きに戯むる 宗倫

(1) 『詩経・大雅・抑』「白圭之玷、尚可磨也。」

(2) 宋玉が『楚辞・九弁』を作り、「悲哉、秋之為氣也」と哀しんだ。宋玉悲愁、杜甫「垂白馮唐老、清秋宋玉悲」(垂白)。

(3) 叔齊。「世に違ふ」とは王位を引き受けず兄の伯夷を追って隠遁したことをいう(史記・伯夷叔齊列伝)。

11 漁^{イサ}笛^{フエ} 江^{カミ}梅^{ウメ}落^{ツク} 漁笛 江梅落つ 守沅

12 朋^{トモ}樽^{サン}庭^{ニハ}竹^{タケ}凄^シ 朋樽 庭竹凄たり 齡

13 愛^{アイ}賢^{ケン}濤^{タウ}避^ヒ晋^{シン} 賢を愛して濤は晋を避く 宮

14 荒^{アラシ}色^{イロ} 姝^{メカシ}亡^{ナシ}驪^リ 色荒んで姝は驪を亡ぼす 良

15 山一面煙カ為ル煙ト 山面 煙は煙と為る 緒

16 野生暄カ是レ締ル 野生カ 暄是れ締 雲

17 緑新蘇ニ石髮ヲ 緑新たにして石髮を蘇す 御

18 暗理秣カ霜蹄ニ 暗理 霜蹄に秣かふ 節

19 愧レ白妍姿カ岳 白きを愧づ 妍姿の岳 澗

20 籍華ヲ詞氣ノ嵇 華を籍く 詞氣の嵇 竹

(4) 野梅。張泌「宝箏横塞雁、怨笛落江梅」(碧戸)。『三体詩』劉長卿「家空帰海燕、人老発江梅」(酬秦系)。

(5) 山溝、嵇康・阮籍らの賢者に追隨して交遊した。

(6) 周幽王が褒姒を寵愛し愚行を繰り返したため、西夷犬戎に侵攻されて驪山の下で殺され国を亡ぼした(史記・周本紀)。

(7) 黄庭堅「群山黛新染、蒙氣寒郁郁」(辛酉憩刀坑口)。煙は14句にある褒姒を喜ばせるためにいたずらに付けさせた烽火のこと。山面と黛の取り合わせは美人の化粧。

(8) 粗野な人にとって冬の日差しが厚着。負暄(列子・楊朱)。

(9) 水辺の石に生える苔。『三体詩』陸龜蒙「天寒夜漱雲芽淨、雪壞晴梳石髮香」(和皮日休酬茅山広文)。

(10) 美しい容姿。『世説新語』潘岳「姿容甚美、風儀閑暢」。

(11) 文辞の勢い。『晋書・嵇康伝』(嵇康)美詞氣、有風儀」。

21 於松ニ琴巧ト絶 松に於いて琴は巧絶 重

22 探杏ヲ榜攀リ躋 杏を探して榜は攀躋 召

23 園日膏ニ車蝶 園は日びに車に膏さす蝶 倫

24 臘残膠ヲ柱ニ鷗 臘は残りて柱に膠する鷗 御

25 神遊無処ニ柅ヲ 神遊 柅らるゝ処なし 良

26 鄙句唇ヲ頰ヲ批ヲ 鄙句 批を頰つことを唇なくす 沉

27 冷節桜燃レ雨ニ 冷節 桜は雨に燃ゆ 雲

28 美陰柳練レ堤ニ 美陰 柳は堤に練る 宮

29 口才柔語ノ燕 口才 柔語の燕 節

30 羽長德音ノ鷄 羽の長 德音の鷄 澗

(12) 長安曲江にある杏園。科挙の合格者が賜宴を受ける場所。「攀躋」は登ること。岑參「高山徒仰止、不得日攀躋」(酬崔十三侍御登玉壘山思故園見寄)。

(13) 車に油を差す。韓愈「膏吾車兮秣吾馬、従子於盤兮終吾生以徜徉」(送李願膺盤石古歌)。

(14) 琴柱を膠で固定する。理論に拘泥し変通の利かないことの比喩。ここは臘月が残る春先の鶯が拙い音色で鳴き、琴柱が固定されたかのように音調の変化のないことを喩えるか。

(15) 「柅」は金属製の車止め、それを使って車を止めること。また熟語「檢柅」は不正行為を検査制止することを意味するから、ここは神遊を抑え止めることか。24句の拘泥墨守からの転換。

(16) 批勅を頒ち賜うことか。

(17) 寒食節。韓偓「何処遇薔薇、殊郷冷節時」(寒食日沙泉雨中看薔薇)。この時節に桜が満開したか。

31席^{シク}上^{イニ}延^{ヘニ}堯^ニ席^{シク} 上^{イニ}に^ヘ席^{シク}く^シ 堯^{イニ}に^ヘ延^ヘぶ^ル席^{シク}

召

32題^イ思^イ媒^イ祐^イ題^イ 思^イを^イ題^イす 祐^イに^イ媒^イする^イ題^イ

良

33不^イ秋^イ翻^イ涙^イ葉^イ 秋^イなら^イず^イして^イ翻^イる^イは^イ涙^イ葉^イ

御

34繼^イ晷^イ親^イ書^イ藜^イ 晷^イを^イ繼^イいで^イ親^イし^イむ^イは^イ書^イ藜^イ

倫

35煉^イ石^イ封^イ候^イ墨^イ 石^イを^イ煉^イる 候^イに^イ封^イず^ル墨^イ

竹

36興^イ叢^イ接^イ衆^イ筥^イ 叢^イを^イ興^イす 衆^イを^イ接^イする^イ筥^イ

沅

37偃^イ唯^イ跛^イ踮^イ 偃^イは^イ唯^イだ^イ跛^イを^イ憐^イれ^イむ^イ踮^イ

御

38濟^イ是^イ振^イ威^イ猊^イ 濟^イは^イ是^イれ^イ威^イを^イ振^イふ^イ猊^イ

節

39似^イ似^イ蒲^イ青^イ劍^イ 似^イたる^イこ^イは^イ似^イたり 蒲^イの^イ青^イ劍^イ

宮

40明^イ明^イ桂^イ玉^イ鏡^イ 明^イを^イ明^イと^イす 桂^イの^イ玉^イ鏡^イ

竹

(18) 杜牧「几席延堯舜、軒墀接禹湯」(華清宮三十韻)。

(19) 于祐。後宮に通ずる御溝から詩の書かれた流葉を書生が拾い、返事を書いて流し返したという故事。唐代の筆記

や小説に多く記載されるが主人公や話の筋が一樣ではない。ここは于祐とし、「方知紅葉是良媒」との件がみえる『青鎖高議・流紅記』を踏まえていると思われる。

(20) 読書の藜光すなわち灯火か。天祿閣で校書中の劉向に仙人が青藜杖で明かりを点した故事(太平広記)。

(21) 足の不自由な鼈、また愚鈍低劣な人もいう。「駟跛鼈而上山兮、吾固知其不能陞」(楚辞・言息)。韓愈「伊余何所擬、跛鼈詎能踊(孟郊)」(会合聯句)。

(22) 菖蒲の葉を剣と喩える。唐・李咸用「柳眉低带泣、蒲劍鋭初抽」(和殷銜推春霖即事)。

41欲^イ晴^イ峰^イ幻^イ出^イ 晴^イれ^イん^イと^イ欲^イして^イ峰^イ幻^イ出^イ

倫

42薄^イ暮^イ路^イ痴^イ迷^イ 暮^イに^イ薄^イつ^イて^イ路^イは^イ痴^イ迷^イ

御

43 虫 豈^ニ織^{リテ} 而^{シテ}衣^ニ 雲

44 蛾^ハ其^ノ副^シ既^ニ筭^ス 竹

45 筭^{カニ}森^メ 駢^メ且^メ角^ヲアリ 重

46 麴^ハ熟^シ 醉^テ如^シ泥^ノ 雲

47 姚^ハ魏^ハ王^ニ天^下 姚魏^ハ天下^ニ王^{たり}

48 羲^ハ和^ス 老^シ郭^ハ西^ニ 義和^ハ郭西^ニ老^す

49 声^ヲ鐘^ノ 声^ヲ四^ニ達^ス 鐘^を声^{して}声^は四^に達^す

50 手^ヲ杖^ヲ手^ヲ輕^ク携^フ 杖^を手^{りて}手^づから輕^く携^ふ 重

(23) 黄庭堅「能和晚煙色、幻出歳寒身」(次韻子瞻題無咎所得与可竹二首粥字韻戲嘲無咎人字韻詠竹、其二)。

(24) 蛾眉の略で美女の意か。『詩経・鄘風』「君子偕老、副笄六珈」毛伝「副者、后夫人之首飾、編髮為之。笄、衡笄也」。

(25) 『論語・雍也』「犁牛之子騂且角、雖欲勿用、山川其舍之乎」。

(26) 牡丹花の品種名で、姚黄と魏花を合わせていう。『歐陽修全集・洛陽牡丹記・花积名』にみえる。瑞溪周鳳「詠歐陽牡丹譜」二十四叢花品中、先看姚魏醉春風」など、

禅僧の間でよく知られたが、後陽成院にも馴染まれたか。

(27) 『山海経』『楚辞』などにみえ、伝説上太陽の母親また太陽を運行を司る神など複数の意味を持つ。ここは西に沈む太陽をいうか。

51 何^ノ晏^{ツル} 約^ル花^ニ 牧 何ぞ晏^{やす}んずる 花^に約^{する}牧 良

52 改^ム名^ヲ 賜^フ李^ヲ 奚 名^を改^む 李^を賜^ふ奚^ニ

53 説^テ唐^ヲ 鈴^ヲ彈^ス 舌^ヲ 唐^を説^{きて}鈴^は舌^を彈^す

54 羹^ヲ建^テ 茗^ヲ濡^ス 臍^ヲ 建^を煮^て茗^は臍^を濡^{らす}

55 困^テ 嗜^ム 千^年 睡^ラ 困^{りて}は千^年の睡^を嗜^む

56 憂^テ 余^ニ 一^日 啼^ラ 憂^{ひて}は七^日の啼^を余^す

57 水^ノ村^ノ 魚^ノ市^ノ 鬧^シ 水^村 魚^市鬧^し

58 旅^ノ 寓^ノ 雁^ノ 雲^ノ 睽^ク 旅^寓 雁^雲睽^く

59 離^ノ 館^ノ 宿^ノ 誰^カ 恋^ハ 離^館の宿 誰^か恋^{ひん}

60 寂^ノ 扉^ノ 颯^ノ 每^ニ 擠^ス 寂^扉 颯^毎に擠^す

(28) 北方少数民族への蔑称、李姓を賜ったというのは、唐の

皇帝が異民族を帰順させる政策か。51句「花」の対偶としての「李」が名字でもある。

(29) 口に唱えて念じること。『三体詩』李洞「十万里程多少難、沙中彈舌授降龍」(送三藏帰西域)。

(30) 建溪、福建省の川の名で、「建溪茶」が有名。雪嶺永瑾「兩地風光供一啜、武陵紅雨建溪春」(桃花茶)。『三体詩』李抄「孤舟一夜東帰客、泣向春風憶建溪」(竹枝詞。前句に同じく『三体詩』の連想か。

(31) 伍子胥に倒された楚を救うために、申包胥が秦に援軍を求め、「包胥立於秦廷、昼夜哭、七日七夜不絶其声」(史記・伍子胥列伝)、秦哀公を感動させたという。ここでこの故事が踏まえられているかは断定しかねるが、憂うのは申包胥のような忠臣がいるか、と取りたい。李白「申包惟慟哭、七日鬢毛斑」(奔亡道中五首、其四)。

61 壁間 欧草創 壁間 欧が草創 御

62 塵裡 秀苦提 塵裡 秀の菩提 澗

63 鏡破 一濃一淡 鏡破りて濃淡を一にす 節

64 社一盟並 耄一倪 社盟 耄倪を並す 竹

65 点レ・陶陸遠 点す陶陸遠 澗

66 分レ品積 聃尼 品を分つ 聃聃尼 竹

67 趨鯉 信奚自 趨鯉 信は奚くよりぞ 御

68 啼鵲 歸去兮 啼鵲 帰んなんいざ 良

69 夢驚 郷万里 夢驚きて郷は万里 宮

70 字様 水丁溪 字様 水は丁溪 雲

(32) 女性の化粧をいう。蘇軾「欲把西湖比西子、淡粧濃抹總相宜」(飲湖上初晴後雨二首、其二)。鏡が割れているので、化粧の濃淡は判然としない。

(33) 老若。『孟子・梁惠王下』「王速出令、反其耄倪、止其重器」。

(34) 陶潜と陸賈。陶淵明は官を捨て貧しい生活に甘んじたのに対して、陸賈は朝政から身を引き、巨額の金を子供に分け生産に供させた(史記・酈生陸賈列伝)。

(35) 『論語・季氏』「嘗独立、鯉趨而過庭」。孔子の子である鯉(伯魚)が小走りで庭を通ったこと。

(36) 『佩文韻府』「丁溪 泉州志德化県南有丁溪、俗云水面丁羅簪纓、宋時一夕雷雨決流、一縱一横、宛成丁字、邑人程楊修果登高第」。

71 嵐 伝征帆翼 嵐は征帆の翼を伝く 良

72 塞 聴哀角嘶 塞には哀角の嘶を聴く 倫

73 登^ト崇^ト麟閣^ノ武 崇きを登^トげて麟閣^ノの武 御

74 儼^カ飾^ル鷄冠^ノ碑 飾るに儼かにして鷄冠^ノの碑 沅

75 炎^シ室^ニ近^カ歟^ハ漢 炎室^ノ 近きかな漢 竹

76 漏^レ天^ト同^ノ者^ハ黎 漏^ル天^ト 同^ノじ者は黎 澗

77 滴^レ光^ヲ于^ス斗^ヲ潦 光を滴^ラす 斗を于^ス潦 召

78 学^レ古^ノ級^ノ空^ニ梯 古を学^ブ 空に級^ノの梯 雲

79 斜^レ照^ル染^ム烏^ノ背^ヲ 斜照 烏背を染^ム 倫

80 孤^レ床^ノ厭^ム蚤^ノ思^ヲ 孤床 蚤思を厭^ム 節

(37) 麒麟閣。『漢書・李広蘇建列伝』「甘露三年、单于始入朝。上思股肱之美、乃凶画其人于麒麟閣、法其形貌、署其官爵姓名(中略)次曰典属国蘇武。皆有功德、知名当世、是以表而揚之」。前句72を蘇武の体験とした。

(38) 金日磾。『漢書・霍光金日磾列伝』「金日磾夷狄亡国、羈虜漢庭、而以篤敬宿主」。

(39) 漢王朝は火徳。『漢書』「旗幟尚赤、協於火徳」。

(40) 天が漏れたかのように雨の多いこと。蘇軾「千章古木臨無地、百尺飛瀉瀉漏天」(広州蒲澗寺)。「黎」は黎民・

黎庶か。

(41) 溜まり水、雨による増水。水が星の光を反射するか。黄庭堅「積潦干斗極、山河皆夜明」。「于」は「干」とすべ

きか。

(42) 「梯」は丹梯、榮達の道をいう。許渾「官満定知帰未得、九重宵漢有丹梯」(送上元王明府赴任)。

81 晚^ト楓^ノ霜^ニ任^ス彩^ヲ 晩楓 霜彩するに任^スす 重

82 下^ル米^ノ畝^ニ催^ス犁^ヲ 下米 畝犁を催^スす 御

83 傾^レ日^ニ牽^ル牛^ノ笠 日に傾^ク 牽牛の笠 節

84 輶^カ雷^ヲ安^ル鹿^ノ聲 雷を輶^カす 安鹿が聲 竹

85 荔^ハ遺^ル天^ノ宝^ノ事^ヲ 荔は天^ノ宝の事を遺^ルす 澗

86 蘭^ハ起^ル楚^ノ騷^ノ悽^ヲ 蘭は楚騷の悽を起^ルす 良

87 讒^ハ鈍^シ無^キ前^ノ刃^ヲ 讒は前^ノ無^キ刃を鈍^シとす 沅

88 機^ハ噴^ク難^キ中^ノ磑^ヲ 機は中^ノ難^キ磑を噴^ク 雲

89 空^ノ棺^ノ磨^ハ変^ル易 空棺 磨は変^ル易 澗

90 百^ノ則^ノ頭^ノ提^ハ搯 百則 頭は提^ハ搯 良

(43) 安禄山。83句の「牛」に対偶するために「禄」を「鹿」に改めたか。鼙は戦鼓、「漁陽鼙鼓動地来、驚破霓裳羽衣曲」(白居易「長恨歌」)。

(44) 『古文真宝』蘇軾「宮中美人一破顔、驚塵濺血流千載。永元荔枝来交州、天宝歲貢取之涪。」(荔枝歎)

(45) 『楚辞・離騷』「戸服艾以盈要兮、謂幽蘭其不可佩。」

(46) 達磨大師は毒殺され埋葬されたが、西方へ帰ったと目撃され、棺にも遺骨がなかった。88句「礎」の連想か。

(47) 宋の禅僧雪竇重頤、『碧巖録』の著者、同書は百則の公案を収録している。「提撕」は教訓、指導。『顔氏家訓』「吾今所以復為此者、非敢軌物範世也、業以整齊門内、提撕子孫」。

91 禅味、僧、熊掌 禅味は僧の熊掌

92 嘉羞、彼、雉翳 嘉羞は彼の雉翳

93 時哉微笑、賈 時かな 微笑の賈

94 道也退身、蠹 道なり 退身の蠹

95 棋計強其弱 棋計 其の弱きを強まず

96 粉粧汗以佳 粉粧 汗すに佳を以てす

97 妾、尊、鴛、肉、鼎 妾は鴛肉の鼎を尊ぶ

98 祖、忘、貝、哆、罍、罍 祖は貝哆の罍を忘す

99 宣、勸、年、宜、却 宣勸 年は宜しく却くべし

100 久、要、朝、願、願、縮 久要 朝は縮むることを願ふ

(48) 美味をいう。沈約「洄蕩嘉羞、揺漾芳醴」(三日侍鳳光殿曲水宴應製詩)。

(49) 賈誼か。若くして文才高くしばは孝文帝に進言した。梁懷王が落馬して死んだことに、太傅としての責任を感じ、抑鬱して三十三歳で亡くなった。

(50) 范蠡。越王勾践を輔佐して呉を倒し雪辱したのち政界を退いた。

(51) 兔を捕る籠。孟郊「鸞獸鮮猜惧、羅人巧罝罍」(石淙)。

佳第九 慶長十九年九月七日

1 菊、為、承、恩、露 菊は恩露を承くるが為に

2 德、香、四、海、皆 德香 四海皆し

3 楓、依、余、勝、景 楓は勝景を余すに依りて

4 詩興 万山佳 御

13 対 鴛鴦冷 対を扱びて鴛鴦冷まし 光勝

5 秋色 先於月 秋色 先んずること月に於いてす節

14 伝音 雁札排 音を伝ひて雁札排す 緒

6 世塵多 満街 世塵 多きは街に満つ 雲

15 心良 牙信 漢 良を心にし信を牙にするは漢 御

7 仙厨 閑味否 仙厨は閑味なりや否や 潤

16 肉幹 骨曹注 幹を肉にし曹を骨にするは注 峰

8 官路 利奔乖 官路 利奔に乖く 竹

17 佳境 幾膏秣 佳境 いくばく膏秣 雲

9 堯歩 踏陳舜 堯歩 陳を踏む舜 良

18 幽栖 常水柴 幽栖 常に水柴 節

10 郝禪 補欠媧 郝禪 欠を補ふ媧 寿洪

19 従吾 尤者杖 吾に従ひて尤けき者は杖 竹

(1) 底本の訓点に従つて「月においてす」と訓むと、月が秋の景色を先取るという意になる。訓点を無視して「秋色月より先だつ」と訓む場合は、前句4で詠まれた詩興を催す山の美景が月よりもさきに秋の気配を感じさせる、となる。

20 給母 織成鞵 母に給す 織り成す鞵 潤

(2) 趙州従念のことか。『景德伝灯録』「趙州観音院従念禪師、曹州郝郷人也、姓郝氏」。

(3) 苦い黄檗と甘い蜜。公案として多くの問答を残した趙州は黄檗希運に参じていたことからの連想か。

11 僧談 分麁蜜 僧談 麁蜜を分つ 重

(4) 漢の使者が上林の雁信を口実に、単于に蘇武の所在を聞き出した(漢書・蘇武伝)。

12 婦礼 有梳釵 婦礼 梳釵有り 外

(5) 唐代画家の韓干、「曹」は曹覇、韓干の師、ともに馬を得意とする。蘇軾「神工妙技帝所収、江都曹韓逝莫留」(韋偃牧馬図)。「注」は渥洼、神馬を産する地。

(6) 車に油を差し、馬に草を与える、旅立ちの用意をいう。韓愈「膏吾車兮秣吾馬、従子於盤兮終吾生以徘徊」(送李願帰盤谷歌)。

(7) 隱者の住まいをいう。李白「緑水接柴門、有如桃花源」
〔之広陵宿常二南郭幽居〕。

(9) 南宋詩人舒岳祥の庭園か、詩によく詠まれる。また『石門文字禪』にも「但見篆畦間、青煙行未已」(送正上人帰黄龍)ほか用例がみえる。

21 幼^スレ幼^スヲ哺^ル兒^ニ燕 幼を幼とす 兒に哺する燕 洪

(10) 杜甫「絶島容煙霧、環洲納曉晡」(大歴三年春白帝城放船出瞿塘峡久居夔府將適江陵漂泊有詩凡四十韻)。

22 功^{トス}レ功^ヲ戰^{シム}勇^ヲ蝸 功を功とす 勇を戦はしむる蝸⁽⁸⁾ 良

(11) 前句28でいう貢ぎものを受けて、仁義という名で民衆の富を漁る網を撒くという意か。『荀子・王制』「故王者富民、霸者富士、僅存之國富大夫、亡國富篋篋」。

23 篆^ニ畦^ヲ煙^ヲ鎖^テ斷^ル 篆畦⁽⁹⁾ 煙は鎖断 外

24 棧^ノ道^ヲ霧^ヲ遮^リ埋^ム 棧道 霧は遮り埋む 重

31 蘆^ヲ交^テ勞^レ過^レ渡^ヲ 蘆交ひて渡を過ぐるに勞す 良

25 嘗^{シム}レ嶮^ヲ唇^ヲ頭^ヲ蜀 嶮しきを嘗む^な 唇頭の蜀 峰

32 芍^ヲ発^ケ忽^ヲ翻^ル階^ニ 芍^{ひら}発けて忽ち階に翻る⁽¹⁰⁾ 竹

26 環^ル洲^ヲ夢^ヲ裡^ノ崖 洲を環る⁽¹⁰⁾ 夢裡の崖 勝

33 舞^ハ象^ヲ箭^ヲ遊^ル蝶 象⁽¹¹⁾箭を舞ふは遊蝶 御

27 千^ノ郷^ヲ推^ハ枕^ヲ近^シ 千郷 枕を推さば近し 節

34 夏^ス鼉^ヲ鼓^ヲ怒^リ蛙 鼉⁽¹²⁾鼓を夏すは怒蛙 外

28 率^シ土^ヲ貢^シ篋^ヲ来^ル 率土 篋ものを貢し来たる 御

35 戴^テ雲^ヲ林^ヲ絮^リ帽 雲を戴きて林は絮帽⁽¹³⁾ 重

29 仁^ノ餌^ヲ擲^ツ民^ヲ網^ヲ 仁餌⁽¹⁴⁾ 民網を擲つ 澗

36 入^レ碓^ニ米^ヲ糠^ヲ篩 碓に入りて米は糠篩 澗

30 手^ヲ撓^ツ挂^ツ祖^ヲ牌^ヲ 手撓 祖牌を挂く 雲

37 宗^ヲ鏡^ヲ誰^カ勤^メ拭^ン 宗鏡⁽¹⁵⁾ 誰か勤めて拭はん 竹

(8) 蝸角の戦い。『莊子・則陽』「有国於蝸之左角者、曰蝸氏、有国於蝸之右角者、曰蛮氏、時相与争地而戰、伏尸

38 健^ニ毫^ヲ姑^ヲ倩^ヲ指^ツ 健毫 姑⁽¹⁶⁾倩指づ 雲

数万」。

39 榮^ヲ辱^ヲ炊^ハ未^ダ熟^サ 榮辱 炊は未だ熟さず 洪

40 微羽 楽無^レ哇 微羽 楽に哇無^レし 節

(12) 達磨祖師が蘆を浮かべて江を渡ったことを踏まえる。策彦周良「東超海漠救迷情、万里長江一葦横」(渡江達磨贊)。

(13) 芍薬の花が階段の辺りにひるがえる。『文選』謝朓「紅葉当階翻、蒼苔依砌上」(直中書省)。

(14) 周文王時代の舞曲。『左氏春秋伝・襄公二十九年』「見舞象箏南籥者、曰美哉」。

(15) 鼉皮で作った鼓、音が鼉の鳴き声に似る。『詩経・大雅』「鼉鼓逢逢、矇瞍奏公」。蛙の鳴き声は両部鼓吹(南史・孔圭列伝)を踏まえるか。

(16) 綿入れの帽子か。蘇軾「嶺上晴雲披絮帽、樹頭初日掛銅鉦」(新城道中二首、其一)。

(17) 策彦周良「今年今日永明日、宗鏡百箇湖水中」(到浄慈寺上宗鏡閣)。

(18) 邯鄲の夢。古澗慈稽「青衿若統邯鄲夢、九十風光五十年」(春睡枕書)。

(19) 淫哇、淫声(聚分韻略)、邪淫の音楽。歐陽修「豈可疾淫哇而欲廢置律呂」(与梅聖梅書)。

41 花、為^レ養^レ賢^ヲ棄^ツ 花は賢を養ふが為に棄つ 勝

42 藻、從^レ挑^レ女^ヲ俳^ス 藻は女を挑むに從ふにして俳す 澗

43 操^レ琴^ヲ鶯^ノ不^レ野^ナ 琴を操りて鶯野ならず 竹

44 吹^レ角^ヲ鳥^ノ其^ヲ啗^リ 角を吹きて鳥それ啗たり 節

45 躑^ノ躑^ノ嵩^ノ奇^ノ産^ナ 躑躑は嵩の奇産 外

46 淡^ノ濃^ノ吳^ノ美^ノ娃^ナ 淡濃は吳の美娃 洪

47 墮^レ眉^ヲ霜^ノ後^ノ柳^ノ 眉を墮とす 霜後の柳 雲

48 濺^レ涙^ヲ塚^ノ前^ノ楮^ノ 涙を濺ぐ 塚前の楮 澗

49 寒^ノ夜^ノ哽^ヲ歎^ヲ蟬^ノ 寒夜 哽びて歎く蟬 良

50 深^ノ閨^ヲ占^レ吉^ヲ尫^ノ 深閨 吉を占ふ尫 御

(20) 詞藻、華麗な詩文。女性に挑むために美辞を連ねて駢麗文を書くこと。

(21) 『詩経・周南』「黄鳥于飛、集於灌木、其鳴啾啾」。

(22) 嵩陽寺のことか。『三体詩』張籍「五渡溪頭躑躑紅、嵩陽寺裏講時鐘」(送李渤)。

(23) 美女の喩え。齊第八63句に既出。

(24) 温庭筠「芙蓉凋嫩臉、楊柳墮新眉」(玉蝴蝶)。

(25) 白居易「芙蓉如面柳如眉、对此如何不垂淚」(長恨歌)。塚前の楮とは楮書で書かれた墓誌銘のことか。

(26) 夢占い。『詩経・小雅』「吉夢維何、維熊維羆、維虺維虺」

(秩秩斯干)。

入五台五首、其五)。

51 臥 孤 丹 乳 綴

臥は孤にして丹乳綴る

洪

(29) 維摩詰、在家の弟子。蘇軾「欲把新詩問遺像、病維摩詰

52 像 久 紫 磨 羅

像は久しくして紫磨羅る

良

更無言」(孤山二詠、並引、其二)。

53 離 俗 門 詰

俗を離るる俗門の詰

雲

(30) 「疚市」という語を、平仄を調整するために「市疚」と

54 厭 漁 漁 屋 懷

漁を厭ふ漁屋の懷

御

したか。曾慥『類說』「蜀有疚市、間且集如疚」。ここは

55 清 癯 逢 雪 竹

清癯 雪に逢ふ竹

峰

単に市場の意を表す。

56 疎 影 漏 陽 槐

疎影 陽を漏らす槐

節

(31) たくらむ心、「鷗鷺忘機」(列子・黄帝)を踏まえる。

「難」は不明。

(32) 倪、かぎり(碧巖録・一六則)。

57 波 漲 改 河 旧

波漲りて河の旧きを改む

澗

61 峰 鬢 鬚 垂 布

峰は鬢鬚たる垂布

外

58 隱 真 居 市 疚

隱真にして市疚に居す

勝

62 棚 鬢 鬚 閨 又

棚は鬢鬚たる閨又

御

59 知 機 鷗 似 難

機を知りて鷗は難むに似たり

御

63 自 珍 棕 扠 杜

自ら珍なりとす 棕扠の杜

雲

60 念 仏 鵲 呼 倪

仏を念じて鵲は倪と呼ぶ

竹

64 至 樂 菜 羹 回

至樂 菜羹の回

節

65 遊 輩 空 諸 有

遊輩 諸有を空す

良

(27) 黃庭堅「扶疏上翠蓋、磊落綴丹乳」(顯聖寺亭枸杞)。

(28) 上等の黄金、ここは黄金の仏像をいう。『虚堂録犁耕』
「世尊臨入涅槃、以手摩胸、普告大衆、汝等善觀吾紫磨
金色之身」。貫休「電激青蓮目、環垂紫磨金」(遇五天僧

66 鳳 皇 匪 等 差

鳳皇 等差に匪ず

外

67 酒 星 天 將 聖

酒星 天の將聖

竹

68 棋 雹 地 商 顔

棋雹 地の商顔

洪

69 側^チ殖^レ傍^レ檐^ニ橘^ニ 側^{そば}ち殖^たてり 檐^に傍^つ橘^ニ 重

70 又^シ生^ス湿^フ雨^ニ菱^ニ 又生^ず 雨^に湿^ふ菱^ニ 竹

(33) 垂^レ流^レる^る瀑布^か。

(34) 「閔」は不明、「閔又」の誤りか、夜叉の意(佩文韻府)。

蘇轍「頭陀旧所識、天寒髮鬢鬢」(次韻子瞻上元見寄)。

(35) 棕^松、棕^欄で作^つた^た松^子。杜甫「棕^松且^薄陋[、]豈^知身^効能[」](松^松子)。

(36) 顔回。「菜羹」との取り合わせは、韓愈「人固有薄卿相之官千乘之位而甘陋巷菜羹者」(与崔群書)に基づくか。

(37) 仏語、すべて、一切。蘇轍「自有真無遍諸有、灯火何碍也嫌渠」(答孔平仲二偈)。

(38) 等級、相違。『顏氏家訓』「星与日月、形色同爾、但以小為其等差」。杜甫「賢愚誠等差、自愛各馳騫」(詠懷二首、其二)。

(39) 星の名、またよく酒を飲む人をいう。「将聖」は『論語・子罕』「固天縱之将聖、又多能也」。

(40) 商山四皓。蘇軾「白髮四老人、何曾在商顔。煩君紙上影、照我胸中山」(書王定国所藏王晋卿画着色山二首其一)。

(41) 一句は建物のすぐ傍らに橘を植えることか。ただ「殖」の訓み方は難解。『万葉集』「橘の下照る庭に殿建てて酒みづきいます我が大君かも」(巻十八、四〇五九)は逆の場合。

71 秦^ト書^ト焼^レ不^レ尽^ト 秦^ト書^ト 焼^けども^尽き^ず 潤

72 秦^ノ祭^ヲ狩^リ而^シ柴^ヲ 秦^ノ祭^ヲ 狩^りて^シ柴^ヲたく 竹

73 蚩^ノ点^ノ外^ノ燎^ノ合^ス 蚩^ノ点^ノして^シ外^ノ燎^ノ合^ス 勝

74 鶻^ノ、双^ノ同^ノ穴^ノ偕^ス 鶻^ノは^シ双^ノにして^シ同^ノ穴^ノの^シ偕^ス 潤

75 槿^ノ籬^ノ紅^ノ暫^ノ借^ス 槿^ノ籬^ノ 紅^ノは^シ暫^ノ借^ス 外

76 松^ノ蔭^ノ緑^ノ相^ノ挨^ス 松^ノ蔭^ノ 緑^ノは^シ相^ノ挨^ス 節

77 廬^ノ、秀^ノ於^ノ冬^ノ嶺^ノ 廬^ノは^シ冬^ノ嶺^ノより^シ秀^ス 御

78 廋^ノ、悲^レ触^ル殿^ノ階^ニ 廋^ノは^シ殿^ノ階^ニに^シ触^ルる^ルこと^ヲを^シ悲^シむ 潤

79 許^レ身^ヲ輕^ク厚^ク禄^ヲ 身^ヲを^シ許^シて^シ厚^ク禄^ヲを^シ輕^クん^ズ 洪

80 濟^テ衆^ヲ設^テ枯^ヲ查^ヲ 衆^ヲを^シ濟^シて^シ枯^ヲ查^ヲを^シ設^ク 雲

(42) 柴を燃やして天を祭る儀礼、柴望。『後漢書』「(中元元年)辛卯、柴望岱宗、登封太山」。

(43) 鶻に同じ、鶻鴞の大きいもの。

(44) 鍾廋。『事物紀原』「臣終南進士鍾廋也、因応挙不捷、舐殿階而死、奉旨賜緑袍而葬」。

(45) 「枯槎」に同じ。枯れた切り株、また筏、小舟。杜甫「枯

查卷拔樹、礪碓共充塞」(三川觀水漲二十韻)。蘇軾「蜀江久不見滄浪、江上枯槎遠可將」(和子由木山引水二首、其一)。

- 81 櫛^{ツル}疾^ニ夏^ハ忙^ト了^ス 疾に櫛る 夏は忙了 良
- 82 延^ル齡^ヲ彭^ガ匹^ノ儕^ト 齡を延るは彭が匹儕 洪
- 83 主張^ス靈洞^ノ鶴 主張 靈洞の鶴 重
- 84 婢^ト視^テ駢^ノ程^ノ駟 婢視 駢程の駟 雲
- 85 答^ハ暮^ニ笛^ヲ村^ノ鐸 暮笛に答ふるは村鐸 御
- 86 透^ス閨^ヲ楨^ヲ野^ノ榿 閨楨を透すは野榿 外
- 87 叢^ハ衰^{ヘテ}鐘^ハ緩^ヤ打^ツ 叢衰へて鐘は緩やかに打つ 雲
- 88 氷^ヲ解^テ筧^ヲ流^レ潜^ル 氷解けて筧は流れ潜る 竹
- 89 何^ノ賊^ヲ偷^ム春^ヲ杏^ノ 何れの賊して春を偷む杏 節
- 90 好^シ速^ニ宜^シ瀑^ニ籠^ル 好速 瀑に宜しき籠 洪

(46) 同類の意、韓愈「猛虎雖云惡、亦各有匹儕」(猛虎行)。「彭」は長寿の彭祖、八百歳まで生きたという(列仙伝)。

(47) 禪語、『碧巖録』に「却去江外打野榿」とみえる。また「閨楨」も禪語、「閨楨子」とも、緊要の意。

- 91 稱^{スル}瀟^湘ノ故^ト鷓 瀟湘の故と稱するは鷓 外
- 92 存^{スル}朔^ノ漠^ノ忠^ヲ覘 朔漠の忠を存するは覘 良
- 93 涼^ト具^ノ北^ノ窓^ノ簾 涼具 北窓の簾 御
- 94 瀾^ハ涵^ス西^ノ岸^ノ蓑 瀾は涵す 西岸の蓑 節
- 95 粘^レ泥^ヲ萍^ヲ固^ス葍 泥に粘して萍は葍を固す 雲
- 96 泣^テ釜^ニ豆^ヲ燃^カ黠^ヲ 釜に泣きて豆黠を燃く 御
- 97 挽^ハ八^ノ斗^ヲ才^ヲ力 八斗を挽くは才力 峰
- 98 演^ル三^ノ墳^ヲ習^テ齋 三墳を演ずるは習齋 洪
- 99 御^ノ詞^ノ儒^モ不^レ及 御詞 儒も及ばず 澗
- 100 祇^ト劫^ヲ寿^ヲ無^レ涯^リ 祇劫 寿崖り無し 節

(48) 北方の砂漠。杜甫「去紫台連朔漠、独留青塚向黄昏」(詠懷古跡五首、其三)。

(49) 『蒙求』「子建八斗」など、曹植の才能の高さをいう。前

句95の「七步詩」を受ける。ここは同時に穀物などの量をいう。

(50) 古代の書物。『左伝・昭公十二年』「是能読三墳、五典、八索、九丘」。蘇軾「先登博戰事斬級、區區何者為三墳」。「習齋」は書齋のことか。

灰第十 慶長十七年三月十三日

1 翼^ハ就^レ牡丹^ノ卵^ヲ 翼は就く 牡丹の卵

2 却^{シテ}嫌^ム飛^ト去^ル催^ス 却つて嫌ふ 飛去の催すことを

3 音^ハ伝^フ羊^ノ柳^ノ燕^ヲ 音は伝ふ 羊柳の燕

4 且^ニ喜^ム遠^ク方^ヲ来^ル 且喜ばすらくは遠方より来たることを

5 鐘^ヲ曙^テ欲^ス西^ノ月^ヲ 鐘曙けて西ならんと欲する月 景洪 璣

6 柄^ヲ移^テ拱^ス北^ニ台^ニ 柄移りて北に拱する台 節

7 軽^シ聃^ヲ韓^ノ道^ノ徳^ヲ 聃を軽んず 韓が道徳 御

8 用^ヒ哲^ニ軾^ニ文^ノ才^ヲ 哲に用ひらる 軾が文才 雲

9 鵲^モ亦^シ再^シ生^シ蜀^ニ 鵲もまた再び蜀に生まる 澗

10 屍^ハ其^ノ多^ク伏^ス雷^ニ 屍は其の多くは雷に伏す 竹

(1) 三台。『晋書』「三台六星、兩兩而居、起文昌、列抵太微。一日天柱、三公之位也。在人曰三公、在天曰三台、主開德宣符也」。

(2) 黃庭堅「儒林丈人有蘇公、相如子雲再生蜀」(次韻王炳之惠玉版紙)。

11 雨^ラ紅^ク秋^ノ怨^ノ涙^ヲ 紅を雨らす 秋怨の涙 良

12 空^ニ色^ヲ世^ノ尊^ノ胎^ヲ 空色 世尊の胎 重

13 僧^ハ護^ス談^ノ禪^ノ竹^ヲ 僧は談禪の竹を護す 緒

14 妾^ハ希^フ連^ノ理^ノ槐^ヲ 妾は連理の槐を希ふ 賢

15 服^ヲ涼^ク壬^ノ癸^ノ服^ヲ 涼を服す 壬癸の服 璣

16 杯^ヲ海^ノ地^ノ天^ノ杯^ヲ 海を杯にす 地天の杯 洪

17 鷺^ハ立^チ知^ル江^ノ浅^キ 鷺立ちて江の浅きを知る 節

18 虫^ハ吟^ミ添^フ夜^ノ哀^ヲ 虫吟じて夜の哀れを添ふ 御

19 灯^ハ吾^ガ床^ノ主^ノ伴^ヲ 灯は吾が床の主伴 雲

20 詩^ハ某境^ノ良^ク媒^ト 詩は某の境の良媒⁽⁵⁾

潤

(3) 前句の雨から空の色を詠みつつ、花を惜しむ秋怨から「色即是空」を付けた。

(4) 仏語、主体と従属。『臨濟録』「互是主伴。出則一時出。一即三三即一」。

(5) 『詩経・衛風』「匪我愆期、子無良媒」。次句の「霜葉」と御溝葉を踏まえる。齊第八32句に既出。

21 霜葉舟如^レ画^カ 霜葉 舟画が如し⁽⁶⁾

竹

22 宮花錦似^レ裁^ル 宮花 錦裁するに似たり⁽⁷⁾

良

23 暖園禽飽^テ睡^ル 暖園 禽は飽くまで睡る

重

24 春社蟻追^テ陪^ル 春社 蟻は追陪

節

25 今^レ是^レ勃興^ノ李^ト 今是 勃興の李⁽⁸⁾

御

26 古^レ稀^ノ至孝^ノ菜^ト 古稀 至孝の菜⁽⁹⁾

竹

27 嘯^テ風^ニ松起^チ舞^フ 風に嘯^ウて松起ちて舞ふ

洪

28 扱^テ径^ヲ菊親^ミ栽^ル 径を扱^クびて菊親^ミから栽^ルう

潤

29 蛙^ハ続^テ晋^ノ哇^ヲ甚^ク 蛙は晋哇の甚しきを続⁽¹⁰⁾く

賢

30 雁^ハ思^フ漢^ノ節^ヲ回^ル 雁は漢節の回⁽¹¹⁾るを思ふ

璠

(6) 一句のものとの語順は難解。「舟画が如し」という訓みは仕方ないが、正しくは「霜葉如画舟」であろう。すなわち一句は(御溝に浮かぶ)紅葉が彩られた舟のようだ、という意。ここは二文字目の「葉」が仄音であるため、四文字目には平音字を用いるべきところ、同じ仄音の「画」を避けて平音の「如」を使ったと推測される。

(7) 宮花の華美さを錦と喩える。王安石「禁柳万条金细燃、宮花一段錦新翻」(崇政殿詳定幕次偶題)。この一句も前句と同様に平仄の関係で語順が調整されたか。正しくは「似裁錦」となるべきところ、二文字目の「花」が平音であるため、四文字目には同じ平音の「裁」を避けて仄音の「似」を配して「錦似裁」とした。

(8) 李白。前句の「蟻」は春社の時に飲まれる「蟻酒」で、飲酒から李白を連想した。また韓愈「勃興得李杜、万類困陵暴」(薦士)とある。

(9) 古稀の年になっても五色の服を着て老年の親を楽しませる老萊子のこと。『二十四孝』「戲彩娛親」などにみえる。

(10) 晋代の音楽、用例は未見。「哇」は淫哇、邪淫な音楽。佳第九40句に既出。嵇康「目惑玄黄、耳務淫哇」(文選・養生論)。

31 屐^ハ痕^ヲ疑^フ嘘^ヲ雪^ヲ 屐痕 雪を嘘⁽¹²⁾むかと疑ふ

潤

32 棋^シ子^シ等^シ重^{スル}レ^ニ台^ト 御

(14) 狐は古巢のある方向へ頭を向けて死ぬという。故郷を恋う表現。『礼記』「古之人有言曰、狐死正首丘、仁也」。屈原『楚辞・九章』「鳥飛反故鄉兮、狐死必首丘」(哀郢)。

33 真^{マコト}隱^{カクレ}莫^シ如^{クハ}橋^ニ 節

41 度^ス衆^ヲ石^ノ橋^ノ詒^ト 御

34 靈^{レイ}神^シ只^シ愛^ス梅^ヲ 澗

42 尋^ス師^ヲ煙^ノ水^ノ財^ト 良

35 謫^シ應^ズ諸^ノ苦^ヲ最^ト 良

43 豈^シ防^シ知^レ識^ノ賊^ト 節

36 約^ハ奈^ニ一^ノ歎^ノ纒^ニ 璘

44 美^シ譽^ノ狀^ノ頭^ノ魁^ト 澗

37 愁^シ館^ノ蛩^ノ為^シ長^シ 竹

45 何^レ白^ク読^ミ書^ノ眼^ト 洪

38 堅^シ氷^ノ狐^ノ有^リ猜^ル 御

46 還^リ緇^カ伝^フ粉^ノ腮^ト 節

39 首^ラ丘^ニ樵^ノ屢^レ倦^ル 澗

47 汗^ニ顔^ヲ輸^ク我^ニ晏^ト 賢

40 履^テ嶮^ヲ客^ニ廻^ス 重

48 披^キ毳^ヲ打^ツ參^ヲ裴^ト 澗

(11) 二つの橋を割ったところ、それぞれ将棋を楽しむ二人の老人が現れたという故事、「橋中四老」(太平広記)。宋・劉克莊「初隱靈芝处、終逃小橋中」(商翁)。

49 柏^ハ祖^ノ庭^ノ奇^ノ觀^ト 璘

(12) 天神菅原道真か。

50 棹^ハ漁^ノ村^ノ乃^レ欵^ト 竹

(13) 顔之推『顏氏家訓』「狐之為獸又多猜疑、故聽河水無流水声、然後敢渡」。許渾「死酬知己道終全、波暖湖冰且自堅」(経故丁補闕郊居)。

(15) 「詠」は告ぐ、または思う意。『詩経・小雅』「豈不懷帰、是用作歌、将母来詠」。「石橋」は仏教天台宗発祥の天台

山にある石橋を指すか。宋之間「待入天台路、看余度石橋」(靈隱寺)。

(16) かすみけむる水面。劉禹錫「煙水五湖如有伴、猶憶堪作釣魚翁」(白舍人見酬拙詩因以寄謝)。

(17) 状元に同じ。

(18) 顔に白粉を付けること。『世説新語・容止』「何平叔美姿儀、面至白、魏明疑其伝粉」。

(19) 前句に続く何晏の故事。『世説新語・容止』「正夏月、与湯餅、既啖、大汗出、以朱衣自拭、色転皎然」。

(20) 裴休、唐の能臣、黄檗禪師に参じた。虎関師錬『濟北集』「北秀之張説、令滔之宋璟、馬祖之權徳興、紫玉之干頤、黄檗之裴休、是皆宰輔維持唐室者也」(宗門十勝論)。

(21) 正しくは「欸乃」。二字とも灰韻仄音、順番変えの原因は不明。舟を漕ぐ棹の音、また舟歌の意。『聯珠詩格』に元結の詩「欸乃曲」がある。

51 浴 駕 衣 儼 飾 浴 駕 衣 儼 かに 飾 る 良

52 瘦 馬 軛 横 推 瘦 馬 軛 を 横 に 推 す 潤

53 籍 与 從 遊 杖 籍 が 与 從 へ て 遊 ぶ は 杖 竹

54 愬 軍 含 走 杖 愬 が 軍 含 み て 走 る は 杖 御

55 戦 凶 峰 伍 伍 戦 凶 峰 は 伍 伍 たり 璠

56 旧 好 日 憶 旧 好 日 び に 憶 たり 賢

57 新 緑 善 隣 宝 新 緑 は 善 隣 の 宝 潤

58 豫 樟 希 世 材 豫 樟 は 希 世 の 材 璠

59 随 波 鷗 出 没 波 に 随 ひ て 鷗 は 出 没 す 節

60 破 曉 兔 傾 類 曉 を 破 り て 兔 は 傾 類 す 重

(22) 車の轅の端に衡(よこぎ)を付けてとめるくさび。韓愈「已窮仏根源、粗識事軛軌」(送文暢師北遊)。

(23) 阮籍。東平太守となった時は驢馬に乗って赴任した(芸文類聚)。

(24) 唐の名将李愬、「含枚入蔡州」という故事。雪夜に急行軍して割拠している蔡州を奇襲した(旧唐書)。欧陽修「(秋風) 縱鉞錚錚、金鉄皆鳴、又如赴敵之兵、銜枚疾走。」(古文真宝「秋風賦」)。

(25) 「伍」は交わる、また古代軍隊の編成単位など。熟語として「伍伍」は杜牧「綺席草芊芊、紫嵐峰伍伍」(題池州弄水亭)と見えるが、漢詩の用例は稀であり、並ぶ様子の意味か。

(26) 友人同士の励まし合うこと。『論語・子路』「朋友切切偲偲」。

61 南¹越¹楚¹礎¹切¹ 南越 楚礎は切なり 御

62 東¹邾¹魯¹一¹拆¹脛¹ 東邾 魯脛は脛たり 賢

63 礼¹ト云¹居¹敬¹ニ孔 礼と云ふ 敬に居る孔 重

64 来¹也¹定¹儲¹崔 来たるや 儲を定むる崔 璘

65 増¹重¹養¹賢¹鼎 重を増す 賢を養ふ鼎 洪

66 相¹攸¹釣¹位¹限 攸を相る 位を釣る限 賢

67 情¹濤¹誰¹恣¹溺¹ 情濤 誰が溺を恣にす 璘

68 除¹夕¹我¹賅¹ 除夕 我が賅なるを賅のる 澗

69 爆¹竹¹冬¹雷¹瑞 爆竹は冬雷の瑞 御

70 院¹藜¹凍¹雨¹皚¹ 院藜は凍雨の皚たり 竹

(27) 春秋時代魯の小さな隣国。『左伝・哀公七年』 「魯擊柝聞於邾」。

(28) 『論語・雍也』 「居敬而行簡、以臨其民、不亦可乎」。

(29) 隠遁していた商山四皓が漢の太子趙王如意に補佐役として迎えられ、その太子の地位を確たるものにした(史記・留侯世家)。商山四皓のうち、夏黄公は姓が崔、名が

(30) 善い場所を選ぶこと。蘇軾「餘齡会有適、独往豈相攸」。

(政輔既見和復次前韻慰鼓盆勸学仏)。

71 生¹施¹山¹二¹八 生まるる施 山は二八 節

72 睥¹華¹築¹于¹思 睥たる華 築は于思 良

73 棄¹甲¹避¹寒¹菜 甲を棄て避寒の菜 澗

74 鋪¹茵¹承¹露¹台 茵を鋪く 承露の台 御

75 漆¹交¹仙¹与¹鶴 漆交 仙と鶴と 重

76 玉¹質¹老¹如¹鮎¹ 玉質 老いて鮎の如し 洪

77 烏¹帽¹鬢¹藏¹素¹ 烏帽 鬢は素を藏す 節

78 青¹篇¹毫¹磨¹煤¹ 青篇 毫は煤を磨す 竹

79 七¹之¹猷¹獨¹興 七の猷は独興 賢

80 大¹禹¹夏¹母¹鍾 大禹 夏は母鍾 璘

(31) 西施、山の美しさの比喻。
(32) 『左伝・宣公二年』 「宋城、華元為植巡功、城者謳曰、睥

其目、瞠其腹。棄甲而復。于思于思、棄甲復來。「築」は宋城を築くこと。次73句の「棄甲」もこれに基づく。

(33) 青編は書籍の意。黃庭堅「洗硯磨松煤、揮洒至日没」(林為之送筆戲贈)。

(34) 前句78の墨を研くことから書家の王子猷を連想し、「独興」は子猷尋戴の故事。

81 碑断_テ魚_ヲ乎魯_カ 碑断ちて魚たらんかは魯

良

82 廟荒_テ熊_ヲ又能_レ 廟荒れて熊また能

潤

83 禁_レ蘇_ヲ消_レ恨_一草 蘇を禁ず 消恨草

璣

84 譬_レ婦_ヲ遇_レ凶_一摧 婦に譬へて凶に遇ふ摧

竹

85 灘急_ニ帆_ヲ傷_ム水_ヲ 灘急にして帆水を傷む

潤

86 炉_ニ困_テ字_ヲ画_ニ灰_ニ 炉に困みて灰に画す

御

87 郷_ニ緘_一雖_ニ罕_ニ見_ト 郷緘 罕に見ると雖も

洪

88 午_ニ梵_一益_レ禳_レ災_ヲ 午梵 益ます災ひを禳ふ

節

89 叢_ニ借_レ簡_一川_ノ潤_一 叢は簡川の潤を借る

良

90 溪_ハ求_レ遠_ニ社_ノ哈_一 溪は遠社の哈を求む

竹

(35) 『抱樸子・遐覽』「諺曰、書三写、魚成魯、虛成虎」。こ

こは断碑の字形が判別しかねることをいう。

(36) 能は熊の一種(説文)。「太平広記」「鯨 堯使鯨治洪水、不勝其任、遂誅之。鯨于羽山、化為黃能、入于羽泉。今

會稽人祭禹廟不用能。水居曰能、陸居曰熊也」。

(37) 蘇樵、草取りや樵の意で、消恨草を刈られないようにすること。

(38) 『詩經・国風』「中谷有蓷、嘆其乾矣、有女仳離、嘸其嘆矣、嘸其嘆矣、遇人艱難」。

(39) 故郷から文字を織り込んである錦が届けられた故事(晋書・列女伝「濤妻蘇氏」。前句84「字」の連想。李白「況有錦字書、開緘使人嗟」(久別離)。

(40) 正午の誦経の声。王安石「午梵隔雲知有寺、夕陽歸去不逢僧」(遊鍾山)。

(41) 「簡川」は不詳、「簡」は人名か。

(42) 東晋の名僧慧遠が廬山東林寺で結んだ白蓮社。「哈」は虎溪三笑の故事。

91 芳_ハ從_レ蓮_一謝_一歌 芳は蓮の謝すより歌む 璣

92 業_ハ為_レ筆_一耕_一培_ス 業は筆の耕すが為に培す 重

93 刈_レ楚_一窓_ノ催_ス景_ヲ 楚を刈りて窓景を催す 御

94 絶_レ芸_一硯_ノ点_ス埃_ヲ 芸を絶して硯は埃を点す 潤

95 感^レ恩^ズ 吳鳳^ノ 杜^ノ 恩を感じず 吳鳳⁽⁴⁾の杜⁽⁵⁾

賢

96 争^レ族^ヲ 駿驢^ノ 恢^ノ 族を争ふ 駿驢の恢

良

97 夢^ハ入^リ 戯^リ 三^ノ 昧^ニ 夢は戯の三昧に入る

竹

98 祝^ハ祈^ル 寿^ヲ 億^ノ 姪^ヲ 祝は寿の億姪⁽⁴⁾を祈る

御

99 惜^デ 帰^ル 塵^ヲ 落^シ 日^ヲ 帰るを惜しみて落日を塵⁽⁴⁾く

節

100 懐^シ 惠^ヲ 仰^グ 高^ノ 陔^ヲ 惠を懐ひて高陔を仰ぐ

洪

(43) 小枝を刈り取る。『詩経・国風』「翹翹錯薪、言刈其楚」
(漢広)。

(よう こんほう・武蔵野大学講師)

(44) 「芸」は書虫を避けるために用いられる香草。李賀「細

縹両行字、蟄虫蠹秋芸」(自昌谷到洛後門)。ここは香草が絶え、硯も埃を蒙り、学業を疎かにしている様子をいう。

(45) 「天呉」は水神の名(山海経)、「紫鳳」は伝説上の鳥。ここは杜甫「北征」の「天呉及紫鳳、顛倒在短褐」に基づく。

(46) 極めて長い時間。『集韻』「十兆曰経、十経曰姪」。「姪」に通じる。貫休「君不見积梵諸天寿億姪、天上人間去復来」(送盧舍人三首、其三)。

(47) 『淮南子・覽冥訓』に見える魯陽揮戈の故事。江第三第4句に既出。